

友 林 蘇 岐

目 次

森林火災保險……田中榮一	空氣……三原忠一
病める頃……川生	安筑蘇門會に別れて……一年生
修學旅行記……越山生	東北の旅……越山生
水道落成記念會……越山生	放浪漫談續……越山生
安渡津より……松島生	新卒業生任地……松島生
謝恩金募集……松島生	編輯謝罪記……松島生

森林火災保險につき

田中榮一

竊つて森林火災保險事業創始の運動を見
るに、獨逸最も早く遠く最世紀七〇年の終
りハノバール王國にその端を發せり、この國
には森林の火災に對して保險希望の森林所
有者多かりしも、火災保險組合の設立には
監督官廳所定の固定資金三十萬馬克を積立
つること困難なりし爲め失敗に終れり、又
一八九三年サクセン森林會に於て林務官レ
ーメル氏がサクセン森林所有者のため森林
火災保險事業を計劃せし事ありしも失敗に
歸し、翌一八九四年ベルリンに於て設立せ
られたる一般獨逸保險會社も同様の成功を
齎さず、その設立後必要なる保證金不足の
結果解散に了れり、而して遂ふて一八九五
年にグラットバツハ火災保險株式會社が全
獨逸の森林に對して火災保險をその特別の
兼營として營業の内に加へ始めてその實行
を見るに至れり、之れに續いて現今に於て
第二の最大森林保險組合として知らる、ライ
ン州火災保險局が、一九〇七年特にライ
ン州の森林に對して保險を開始すべくジュ
ッセルドルフに現れたり、而して八一九〇
八年にはウエストフワールヤ火災協會が森
林の保險を開始し、一九一二年以後に於て
はメルゼブルグに地方火災協會、その他マ
グデブルグ地方火災協會及シユレスウイツ
ヒホルスタイン地方火災協會が現はれ森

林火災保險を兼營するに至れり。

森林火災保險に限らず凡て保險事業の經
營は、その性質上大組織に行ふを要す、こ
れ保險の主旨たる危險分配を行ふには成る
可く、長き時、廣き場所及多くの人に對し
て爲すことを要するを以てなり、その意味
に於て獨逸の森林火災保險が單獨に行ふも
のなく、他の保險會社の兼營若しくは保險
協會の經營或は、官營なるは、頗る適切な
經營方法なると雖も、又一面森林火災保
險の幼稚なる事をなすものなりと言はざる
可からず、而して今獨逸に於ける森林火災
保險の統計を所持せざるを以て、全体につ
き保險面積、契約高等その成績を知る事を
得ざるも、只ライン州に於ける森林火災保
險の狀況を山林彙報より摘錄すれば次の如
し。

同州に於ける森林火災保險は州立火災保
險組合之れを行ふ、此組合は最初建物火災
保險を行ふ目的にて設立せられしも、後副
事業として動産火災保險を開始し、次いで
一九〇七年より森林火災保險を開始す、此
森林火災保險は單に森林所有者に對する財
產上の損害補填のみを目的とするものに非
ずして其本旨とする處は、一般公益的見地
に立ちて森林所有者に對して森林擔保能力
及其再造林費を保障し以て林業特に其法
正施業を促進せんとするに外ならず、森林
火災保險は斯る公益的目的を有するものな
るを以て、公立保險組合は其森林火災保險

事業を開始して以来少なからざる犠牲（一九〇七年より一九一九年に至る期間に於て収入金は九七三、四四九馬克にして、其損害のため仕拂ひたる金額は一、一六八、二七二馬克にして、今日に至るまで已に一九四八二三馬克の損失を招きたるを見るべく尙右の計算には營業費を含まざるを以て之れを加算するときは、より以上の損失となる）を忍び極めて低率なる保険料に同じ、鋭意森林火災保險事業の普及發達に努力し斯くて其の開設の當年六、八四〇「ヘクター」の保險面積を有したりしが、一九二〇年一月一日の數字は一八六九件、一一二二〇二「ヘクター」を示し、内潤葉樹四五、〇〇〇「ヘクター」針葉樹一二八、〇〇〇「ヘクター」混雑林二八、〇〇〇「ヘクター」の割合を示し保險金額一六〇萬馬克に上り、ライン州に於ては國有林面積一三三、二五八「ヘクター」公有面積三〇八、六五一「ヘクター」私有林面積三一、九〇九「ヘクター」公私有林合計六二七、五〇〇「ヘクター」を示すを以て、公私有林面積の約六分の一に當る面積が保險に附せられたるを見る而して當談保險組合の意見に依れば、既に最も危険多き森林は大体に於て保險済みなるを以て保險面積は今後増加する所なかるべし、然し此の面積はライン州一州の保險組合としては相當の成績なりしと雖も、收支計算に於て前記の如く多大の缺損を生じたる以上

たとへ公益的目的を有するとは云へ全体より見れば其成績良好なりと云ふ可からず。次に我國の森林火災保險事業を見るにその實施日尙淺く僅に東邦火災保險株式會社に於てその營業として大正十年初頭より之れを取扱を開始せるのみ、本年一月發行同社年報第一號には森林火災保險に關する記事に記載せり、之によれば我國に於ける森林火災保險創始運動の事情明かなるを以て左に轉載せん。

近時森林火災保險の必要が漸く識者の間に痛感されて参りました、政府でも全國土の三の二以上に至る山林に對し組織的に基本調査を行つて、森林火災保險の實を擧げたいとして意嚮を洩さる、事となつたのは實に喜ばしい事でありませう。

我が東邦保險は他の同業者に先んじて大正十年初頭より、既に此の森林火災保險の營業を開始し、大に之が唱導に力めて來たのであります、此の際此の機運に乗じて一層の努力を致したいと思ふのであります、獨逸などでは、州立、民間等の會社に依て盛んに營業されつゝ、あることで我國でも必ず大なる成功を收め得ること、確信します。

森林火災保險事業に就いては、靜岡縣中泉町の素封家である川島茂氏が、今より十年以來既に其必要を唱導し、政府當局は勿論學者實業家を歴訪して、國家の森林政策の立場より斯業創始の一日の忽

緒に附すべからざるを力説され、殆んど寢食を忘れて東奔西奔宣傳に努力せられたれども、當時は世人其の必要を認めなからず時期の熟さなかつたので創始の難局に當らなかつたのであります、川島氏はそれを遺憾とし一時自から森林保險會社の設立を計劃された事もありましたが種々事情のために進捗することが出来ませんでした、然し不屈不撓なる氏の熱誠なる努力は社會の反響を喚び起し、當局又之れに耳を傾くる時運を形成したのであります、然るに茲に亦金融問題の立場より森林火災保險制度の必要を唱導し要路の人に多年力説宣傳された人があります、それは我が國の治水家森林家として功勞ある金森吉次郎氏であります、氏は岐阜縣大垣の舊家で夙に治水植林に志し私財を投すること數十萬、銳意地方の開発に力を盡されて居る方でありませう、大垣の水害は實に甚だしいものであるが害を免かるゝには植林より外に途がない、然も植林に就いては金融の途殆んど絶無である、森林が莫大な價格を以て賣買されるに拘らず、金融の對價物となる事が出来なない爲め森林事業の發達を阻止せらるゝを氏は大いに遺憾とし、種々その方面の名士に熱心に運動されたのであります、森林の賣買には森林の土地よりも立木の森林の方が遙かに高價に取引されることあるのに、金融の場合に擔保として

は土地の方が相當の價格に見積られ、立木は殆んど無價値なものと見て扱はれて居るは頗る不合理な話ですが、土地は火災の憂ひが絶對にないけれども森林の火災率は非常に高いと見られて居るからであります、茲に於てか森林火災保險必要が生ずるので森林に火災保險を附せないで、どうしても森林所有者の信用を増し其の經營を全安ならしむる事が出来ないのであります、森林事業を保護し殖林を奨励することは、國家經濟策上尤も肝要なことでありまして、近年のやうに亂伐が行はれその補給殖林がそれに伴はない時は、雨期に河川の氾濫による莫大なる水害、旱魃による河川涸渇のため農作物に非常な損害を與へるばかりでなく米國に次ぐの水力電氣國たる我國も潤たる河では電力供給も出来ないのであります、恐る可き此の災害を除くには植林事業を盛んにしなければなりませんので、當局者も時々其急務を宣傳し一般林業家も其必要を認めて居るのですか造林事業といふものは他の一般工業及商業と異つて、資本を投下してより其回收までには長い期間を要しますので、金融業者より特別の援助を受けて長期に亘つて融通してもらはねばならぬのであります、そればかりでなく森林事業なるものは火災の危険率が比較的高いので万一火災に遭遇すれば數十年の間苦心經營した事業も

一朝で烏有に歸する危険が伴ふのですから、保險業者が此危険を負担し企業の安全を保證しない限り金融者は之に對して資本を融通することを躊躇する譯であります、斯ういふ事情ですから森林に對する保險事業が發達しなければならぬ森林事業の前途は暗澹たるものと云はなければならぬと云ふ、我が社は此の國家的問題に對して犠牲を拂つても森林政策を全ふさせたいと決心したのであります。

丁度瀬尾調査課長が横濱支店長たる關係より先覺者川島氏とも了解を得、同氏及金森吉次郎氏の熱誠なる援助によつて愈々森林保險に着手することになつたのであります、恰もよし當局も山林の衝に當る農商務省は勿論、土木の方面に於ける内務省、水力電氣の立場より遞信省も各其意見の一致を見其機運が愈々熟しました、殊に農商務省山林局は特別の便宜を與へられ、森林保險に關する各種の材料を蒐集し種々研究の結果充分の確信を得たので、大正九年十二月二日森林火災保險營業の認可を主務官廳より受け、大正十年一月七日營業開始の披露をいたしたのであります。

これ我が國に於ける森林火災保險の生るに至つた歴史でありまして我が社は實に其第一頁を印したものであります、而も金森吉次郎氏はその營業開始後直ちに十萬圓の契約をされ、茲に我が國最初の

森林火災保險の契約者として特筆されることになつたのであります、金森氏は從來の持論たる森林を擔ぐとする金融機關開拓のため、要路の大官實業家の巨頭を説き、田尻稻次郎博士、前勸業銀行總裁志村源太郎氏、川上勸業銀行理事等の幹旋を得、遂に勸業銀行より森林を擔保として金融を受けるの途を開かれたのであります、かくの如くにして生れ出でました保險も其後政府當局として非常に注目され、既に山林基礎調査も開始され、位で遠からぬ中に、これは我保險界の一勢力たるを失はないと信するのであります、此の保險は財界の豊富な擔保物を供給しますから金融に至大の好影響を及ぼします、林業家は在來一般銀行より融通して貰つて居た資金の利率よりも、遙かに低利な資金を勸業銀行、農工銀行より自由に借りることが出来ますから、その利率の差で優に保險料を支拂ふことが出来します。

本社の取扱ふ森林火災保險の目的物は樹齡十ヶ年以上の造林で天然及樹齡十ヶ年以下のものは取扱つて居りませぬ、保險の事は地方別、林別、樹齡別に區別し被保險物件の火災危険程度を參照して公平に且つ低廉に量定してあります、地方別は、大林區署別によつて、青森、秋田、東京、大阪、熊本、鹿兒島、高知、臺灣の各地方に分つて居ます。

「森林火災保險の事業の發達が國家經濟上如何に急務であるが又我國の現狀及本社は使命は大概以上で御了解のこと、信じます。(以下略)」

我が國々土の三分の二を占め其の價格實に九十六億六千萬圓金富力三百七十五億の四分の一に相當する山林を目的とする事業にありては其の創始餘りに遅く未だ微々たりと雖も、其の發達の可否は森林經營の上に至大の關係を有するものなるを以て、吾人林業に携ふるもの、刮目して見る可きものなりとす。」

空氣 焰 國 原 咲 也

編輯員各位吾輩先年佛郎巴里に世界聯盟會議の開かるのとき芋氣焔をあげて大に林友諸君に問はんとするところありき曰く御芋氣焔と芋氣焔 琉球人士の禁酒節酒デモクラシイより金倉ホシイ米倉ホシイ聯盟會議も一經の戰爭 急に望む可からず平和の世界 普選準備として國民に政治教育の必要 劃一的形式的教育の打破 補習教育振興 葬祭坊主撲滅 軍備制限分業之制限等なり其々々を聞し來るに今日と雖も名論たり卓説たるを失はす

ハーデング大統領は吾輩の意見を用いて太平洋會議を起し我政府は我輩に従ひて軍事豫算を削り政友會又普選尙早を唱ふグリーシステム、ドルドンプラン自由教育、全人

教育等の教育説流行し黒衣同盟起る第一として我輩の意見を用いざるなり而も吾輩に何等の挨拶なし恐らく本會に對しても疎遠なるべし怪しからぬ奴共なり。

一方我輩の御芋氣焔は御芋の求め難く御酒を合すれば外國米常食の倍額に達するに閉口し一時中止して山中より出世の時に再試することとし茶、水を飲んで空氣焔をあげんとするに至りて從つて問題は天下國家の一大事に及ばず目提舉近の

林友誌の改善意見

- と出掛けたり久しく論ぜられた本誌の改善案も愈々具體的となり實行のとなつて來た事を喜ぶ既に紙質を改善した單にあれ丈でも非常に氣持が善くなつた。
- 本誌經營の困難は編輯當時者が先年來度々發表する、所により拜察するに
- (1) 經費の不足 校外同窓よりの誌代未納
 - (2) 原稿の拂底 會員の投稿が少な
 - (3) 編輯事務が餘暇利用な爲万全を期し難いにあるらしく會員諸君の希望には
 - (4) 体型も改善し度
 - (5) 内容も豊富にし度
- の二つが看手さる、蛇足の様であるが我輩の希望を述べて見よう
- (1) の經費の問題は編輯當局の發表の通り獨立會計とする事には賛成であるが年額六拾錢の臨時金としての醜金では現在の程度位のものしか發行出來まい會費の集らないのは小金の送達がつい面倒の爲忘れてしも

うので會員諸君の滞納は何等の惡意や出し措みは無びと信する輪湖君の言ふ様に金壹圓乃至貳圓に増額して集金郵便により御集めあり度い。

更に慾を言へば年々の此手数を省く爲不可成なら一時金として拾圓乃至貳拾圓を醜金あり度い時は全會員に實行出來ないとして此規定を附加して貰ひ度い。

更にもう一つ希望を言へば校友會雜誌部が文具類紙幣教科書日用雜貨の購買方を經營してくれられた其利益で本誌の發展に資すると共に在校會員の利便が多かろうと思ふ而し是は資本と商方と手数を要する事でうつかや損ふと飛んだ損害を招く事があるが小より大に經驗をつんで行つたら大丈夫だらうと思ふ。

(2) の原稿の問題は

A 教職各位に毎月又は隔月一文宛は専門の事又は趣味を持たる、事柄につき投稿して貰ふ事

B 會員諸君は會又は學校への年賀狀轉任轉居其他一身上の出來事の通知の中に感想なり創作なり周知に家族の消長林友關係の事を書き加へ第一回は必ずやつて貰ふ事殊に趣味あるは蘇門會便りである。

C 雜誌營業者がやる様な問題を提供して原稿用紙も送つて會員勿論會員外の人々迄御得意の事柄や携つて居る事業等の寄稿を願ふ事、例令は新潟の宇志君

に貴縣に於ける森林的副業に於て一文を滯米の西野氏に戦後の宗教觀と言ふ類を頼む

D 本會を訪問する名士の講話談論其他内外の雜誌新聞の抄録新刊新林業其の紹介等をして貰ふ。

林業の雜誌と言へば大日本山林會報しかなかつた二十年前林業書と言つて二十三十冊しかなかつたが今日汗牛充棟も當ならない出版物外國の出版物等は林業林學に従事するものは一通りは見えて置きたいが實際開も無い金も無い金があつても買へない本がある買つても讀めない解らない本が多い外國物は皆夫だ是等と吾々忙人にも讀め解る様に抄録したり譯補したりして掲載してくれたら此上ない。

こんな事が完全に出來る様に發展すれば年額一圓は愚月額貳圓も敢て辭せないものも多かろうと思ふ

E 會員や其家族蘇門會就職せる官衙學校會社其他其地方の森林林業名勝舊跡風俗習慣樹木其他の持場等の寫眞畫ハガキ等を寄贈して貰つて掲載する事が出來たら錦上更に花を添ゆるものだらう

(3) の編輯事務の問題は經費によつて左右される御手傳をして戴いたら饒饒位奢る可く編輯當事者には報酬を給し愈々發展し益進歩して大雜誌となつたら數人乃至數十人の編輯庶務會計の諸員を置いて宜い

(4) の体裁と(5) の内容の中内容は(2) に於て述べた様な方法をされば自ら改善される体裁も金次第であるが今の大阪を改めて菊版とし厚表紙をつけて永久保存に便利な様に旭日孔を附して貰ひたい、頁の如きは經費により伸縮してよいと思ふ我輩は林友誌は第一號から全部保存して居る閑な時に讀んで見て非常に面白い死んだ高樋の議論なんか追憶の經である吾々の實行の上に參考になる事柄も少なくない一寸見てホグ箱へ投げ込む様な態度はどうしてもとれない、八百名の兄弟の聲が保存されてある。

大正十二年八月廿八日琉球名産の

颱風起り室内に籠り双兒を守りつ、

創作

病める頃 三原 忠一

おそ夏の夕陽がとつぷり暮れて邊りが漸く物靜に歸る頃には道夫は決まつてその病める身を病院の押し窓に凭らせて赤く燈された街の灯に見入り乍ら寂しい口調の歌を口誦したのであつた。

「島根さん……」突然後で聲がしたので道夫は一才振り返つて

「ア、木村さん、まあお話し……」道夫は何時もの様に馴れきつたお互同志の様な口振りで云いてきびしく笑つた。

「ほんとに今夜は心に落ち付きのある晩ですはネ……」と云つて木村はチラと道夫の方を見て微かに笑ふ様にして

「それに今夜は大變月が澄んで居ますのネ」と云ひながら窓から覗くやうにして月を見詰めて居た。

「僕は此の頃なんとなく居た、まらない寂しい氣分によく襲はれる事があつてね!丁度美いらやんがたつた一人の妹に死なれた時を聯想して何人とも言ひ様のない程頼りない淋しい情緒を知れやうにね……」

道夫は斯う云つて木村のはつた面さしを覗くやうにしてまた寂しく笑つた。

「美しいやんは何時までもこの病院に居るんかね……」道夫は月に見入るやうにしながら斯う聞いた。

「わ、長く居る事もないのですが……」木村の語尾は稍々顫へを帯びて居た。

森と静まり返つた院内はカタリとせすに寂漠に浸されて居た只折々年若い看護婦が皿でも洗つて居るらしい響がかすれてくる許りだつた。

「何か歌ひませうか」木村はそこに置かれてあつた讚美歌の本を見て急に思ひ出したらしく道夫を見て云つた。

「わ、歌ひませうか」と道夫は云つたものの、その言葉の奥底には何とも堪へ難い憂鬱なそして哀切な意識が淀んで居るかのやうに思はれた、中天に懸つた月光はその淡い光を銀杏樹の隙間から夜窓を通して室の中

に射し込んで居た。
……サハラのはてに日は落ちて

空の夕はへうつろへば

椰子の葉末に月みえて

ナイルに騒ぐサレ波……

この時階下の三號あたりの病室から女性の澄みきつた然も細くゆるやかに其の余韻の極めて淋しい歌が洩れ聞えてきた。

「あ、誰れか歌つて居るね……」道夫は見て居た。黒島さんから一寸隙をそらせて云つた。「ね、誰か黒島さんですわ……」と木村は道夫の顔を見詰るやうにして耳を傾け乍ら押し黙つて聞いて居たがやがて

「あの方もお不仕合せな方ですの……」と云つたが、つづけて

「あの方は御両親がいないですつて何でもあの方が街の女學校を卒業した年に不幸にも両親と……末の妹とを當時流行つた感冒のために失はれてしまつたとの事で今は一昨年嫁いだ姉さんの家に勉強してお出でなさるのですつて……ほんとに不幸な方ですわね……」斯う必々と云つて彼女はさも自分の事でもあるらしくほろりとするのであつた。

「ほんとに不幸な方だね……」道夫は窓下の暗い庭の方を見やりながらしんみりとして云つた。

「その人は勉強して何處かへ行くつて云ふのかね」道夫は今木村が云つた言葉の一節を思ひ出して淋しい口調で聞いた。

「ね、何でも來年女子大學とかへ行くのですつて、それはほんとに勉強する方ですわ」木村の聲はふるへて居た。
「幾つになるの」
「十九だとか言ひましたわ」
道夫は感心したやうな表情で聞いて居た。
(未完)

安筑蘇門會に別れて

瀬川 生

薄べらな紙片一枚に任地の自由を委したる私共が動かされることに對し不満を抱へても仕方がないが余は突然にやられる。それが榮轉でも左遷でも一寸閉口する。

私も三年の松本在の生活から突然佐久高生の一隅に居る移す事になり四月から山中生活を續けて居る。そして何んともなく懐しみを感ずる松本の地を思ひ出すと同時に一番印象の深い安筑蘇門會を考へていろいろと當時の事を追想してみようとする。かなり大勢居る會員諸氏のいろいろが頭に浮んでくる。越前山人の懷友録に依つて各地に活動せらるゝ未知既知の蘇友に懐かしさを覺へた私は蘇門會員であつた方既にある方の様子が各地の蘇友に知らるゝことは私が感じたと同様にきつと懐かしと思はれること、考へられるで懷友録に真似て書いてみようと思ふ、無論他意あるのではなくほんとうの親みの心で書くのですから御腹立のな

い様にお願ひして置く。
高橋作次氏(三回)常に微笑を湛へながら日本北アルプス五萬町歩の國有林總取締として大町の一角に敏腕を振はれて居られる都内に電氣事業が始まつたので熱心に研究せられて居る御様子でした御病氣は其の後のかい。青木重俊氏(十六)都から落ちついた態度でやつて居る。御病氣は其の後の頃は大分御壯健になられた様子無闇を祈る花林準則氏(十七)其の聲がよい、風貌といふ、森林官に好適な益々奮勵を望む。長谷川要治氏(十八)身は細いが元氣旺盛中々事務家の様に見受けられる以上若い三君は高橋氏のお膝下にあつて日本アルプスを乗り廻して居る。木村哲治氏(四)同じ福島生れだが蘇友としてお目にかゝつたのは今年の蘇門會で初めて北安の郡役所に敏腕を振はれて居る。蘇門會の踊りの音頭取りに推薦したい等々力官一氏(十二)氏の腕を振ふに官界はあまりに狭かつた退いて實業界に雄飛せんと目下安曇電燈社に居ながら竊に形勢を觀望し居る早晩大きな事を動かすだらう。等々力與八氏(十三)豊科で偶然出會ひ私共が役人の足元にも寄りつけない程の大きい話をせられました四月に松本市の某商店に御養子になられ華燭の典を挙げられた大いに發展を祈る。黒岩正平氏(二)蘇門會の元老として常に私共末輩を指導して下さる方大に敬服して居る南安島川村に本陣を構へ殖産興業に奔走せられて居る。

安藤次郎氏(九)學校時代はかなり暴れ屋の様承はつて居たが今は頗る温和な好紳士そのフロックを着られた姿は實に堂々たるもの東筑摩郡役所に勤められ林政に腕を振はれて居る。久保田那治氏(十三)東筑坂北村に居てあの邊の林業を獨りで奮奮ふて居たが今は北信に居るうつされた由少しも便りがない。勝野忠一氏(十七)東筑に居られたが官海にはいられた様。和田宗吉氏(四)島々の官行事業で敏腕を振はれて居る元氣旺盛スキーで真冬の乗鞍岳を征服され平然たるもの益々御奮勵を祈る。柏澤國治氏(八)バキ／＼した調子で片丘村方面の大林業を經營せられて居たが今は北信にお出の由。中垣英一氏(十一)松本造林所の造林主任として大算算を切り廻して居る都山流に御熱心で近頃大分御上達の様子。關谷静夫氏(十)松本造林所に勤められ淺間温泉山邊温泉方面から遠く諏訪温泉方面を受持たれ盛んにやつて居られるいまだお獨り目下選定中の由。有賀正一氏(十三)四國から先頃御轉任前同署に勤められる中々の左黨にて同所員總掛りでも及ぶまい仕事もこの通りだから結構だ。樋口勵氏(十三)元氣に於て先會員中の第一位十五町歩の植尻苗圃を奮奮ひ旺々なものだ六月は玉の様な男子御出生の筈愈々芽出度い。市岡巖氏(十九)若き藝術家でなタイプの人だ松本造林所の一角に陣取り琴古流を宣傳して居る。中島庸三氏(六)官界を退いてか

ら植尻に屋根板製材所を設けモーターを据付て盛んに發展せられて居る余りもうからないうちで言つて居るが何んだかわからない。加藤純一氏(二)久原の林業部方面で第一の乗鞍山麓から伐採木を出して安曇地方の人々をアツと言はせた程の敏腕家。淺間温泉紅葉館の營業部長としても振つて居る淺間温泉訪問の方は同館に敬意を表する。中川源太氏(十三)越後の小林區所を退て今は安曇村の大林業經營の任に當つて居る温厚な森林官である。藤澤甲子十氏(十六)しばらく東筑新村の製材所にいたが東京戀して再び上京せられた大に勵まれん事を望む。長崎信一氏(十七)大元氣で今市小林區署に勤められてゐる。

こんな風に書いてあると懐かしい諸兄の姿が目につく安筑蘇門會から離れてもどうぞ御指導を願ひます。筆を擱くに當つて會と會員諸兄の御隆盛を祈る。一二、六、五湯澤官行事務所にて

旅行記 一年生

五月十四日

午前七時二十分の汽車に乗して三日間の修學旅行に向ふ。曇り勝であつた空は自分達の出立を祝する様に今朝は晴れ渡つて初夏の陽光が車窓から差し込んで来すかに汗ばむのを覺える。緑の山々に、つじ、山咲藤等が咲き乱れてゐる其の間を流れ瀬とな

つては白き泡を淵となつては太陽に光る木曾川に沿ふて汽車はひた走る。
もう夢は豊かな色に實のつてゐる桑も葉を擴げきつて所々摘む人の姿は見受けられる。
高藏寺附近の多くのトンネルをくぐり盡してしまふと眼界次第に開け山は遠くなつて行く空は廣く晴れ渡つて時々雲雀が囀りつゝ、高く昇る此の上天氣を喜び語り合う中に早くも大會根驛に着いた其處で電車に乗り山の彼方四里の瀬戸に向ふ。
廣い麥畑茂々合つた木立を渡つて來る風が心地よい何處かで蟬が鳴いてゐる。
陽の照りつける乾き、つたる道を二時間も走つて瀬戸に着く砂はこりの多い道を通つて愛知實業學校を見、砂防工事を見に行く汗を流しながら山を登つたり下つたりして説明を聞く木々の葉には町の大煙突から吐き出す炭素が黒く附着して居る。見渡す限りどの山も完全に木の繁つて居る山は少い禿げた赤土の山が遠く迄續いて居る砂防の爲めに植えた木も乾燥し易い崩壊し易い土質の爲に萎縮してしまつて延び得ない。
歸途陶玉園工場を見る、茶碗花瓶の様な物が面白く雜作なく出来る、其の手際に見て皆動かうともしない陶器陳列館を見電車にてもどる、森下で市内電車に乗り替へ松葉屋旅館に第一日目の宿を取る、九時半迄外出を許され市中を散歩して歸る、十時頃皆床に着いたが嬉しさが雜放歌となり

容易に寝れぬ。

五月十五日

朝各自單獨行にて熱田驛前へ集まる。

日本車輛製造會社參觀機械の唸り鐵鎚の響

耳も聾するばかりだ職工は皆汗を流して働

いて居る、之れを見て自然を相手にする自

分達の業がしみ／＼幸福に思はれた。

熱田神宮境内に休して白鳥貯木場に至る

事務所で一休み案内に従つて場内を一週す

神宮建築用材もある上白鳥間専用と書い

た貨物列車が幾臺もある。

池上に出てゐる材木だけでも莫大なものだ

全部で三十萬石もあるとか。

晝食後 今日本校の開校記念に當るので

午後四時頃迄に本日の宿、清駒別館に集ま

る約束にて自由行動。

或る者は築港へ或る者は市内に三々五々樂

しく連れだつて別れる。

五月十六日

徒歩で西區の淺野合板所へ行く今朝は皆な

疲れた様な元氣の無い顔をしてゐる。

一時間程待つて工場の方へ行く木を煮る香

が著しく漂ふて居る熱湯に十時間以上つけ

られて生にもどつたと云はれる大い丸木が

面白い様に巾廣く剥けて行く夫れを乾燥し

て張り合する迄皆機械の力によつて僅少な

時間で仕上がりつてしまふ。

見終つて城の方へ行く城門を入つた所で離

宮を拜し電車で舞鶴公園へ行く。

十一時迄音樂堂に集まる事にして入口で

別れるけれど皆一様に動物園の方へ吸込ま

れて行く。

鳥の聲の叫びは人の心をせかせつ、奥へ

奥へと誘ひ込む丁度今羽を揃けて居る孔雀

や錦鶏の美を賞し猿にたはひれたりしてし

ばしは身の旅にある事の時移り行く事も

忘れて打ち興じて居た。

音樂堂の側で晝食をし自由に二時半迄に停

車場に集まる事にする。

商品陳列館へ行く者すぐ驛へ急ぐもの公園

に残る者自由となれば急に元氣が出て来る

其の内雨が降り出したので急いで集まる。

三時十分の電車で一所になつた三年の人達

と歸る雨はやみさうにもなく降りしきつて

居る、車内は笛やら色々の樂器の音で陽氣

だ八時半近い頃福島驛着迎へに來た人達と

語りながら寄宿へ宿へと袂を別つ。

一年の旅はもう終つてしまつた此の旅

に依つて自分達はどれだけ教へられたであ

らう三日の日と旅費とは決して無駄になつ

たのではないと思ふ。(完)

東北の夜汽車

越 畔 山 人

六月二十七日夜八時秋田廻り青森急行は激

しい雨を衝いて北へ／＼と走り出した。

乗合はと見ると流石に何れも東北臭いお隣

りは余り遠くはないらしいが筋向ひには山

形行の女中君前方には今し方背廣を着替た

秋田の學生兄妹及び兵隊上りらしい番頭君

なんぞ今の先送見送人とガヤ／＼騒いだ後

の寂しさ！先づ旅愁氣分に浸る。

大宮邊迄は岩倉の生徒などが乗つてゐたが

成程鐵道の關係者は急行でも何でもロハで

乗れて結構なものぢや。

度々で倦る位知つてゐる宇都宮から先はソ

ロ／＼眠くなり白河邊りは夢現つ。

◆日本の鐵道

米澤邊りで目が覺めて見ると一面の田園を

走りつゝある恰かも田植後の苗が青々と梅

雨に恵まれて満腹といつた貌！今や一番草

の盛りだ。

此邊から乗客の入換も目立つて來る何時の

間にか山ハの大切な帽子は不心得な奴の荷

物の下になつてスツカリ臺なしになつてゐ

る日本人の公德心が此乗物で一番よく其アラ

を曝してゐるには閉口だ。

夫れに此鐵道が又甚だ不完全極まる事も癪だ

が長い旅殊に夜行するものが二人席に長つ

てゐなければならぬとはヒドク虐待したもの

のだおまけに満員となり長々と立往生の憂

目を見る全く以て寒心してしまふ。

◆生保内線

大曲驛へ下車する時見覺のある人がお辭儀

をした「ドチラへ」「東京へ行つて來まし

た」ナアンダ昨夕かい全乗合であつた。

のか驛で一寸休むと「Hさんですか」とM

運送店の若主人が迎へに來た即ち角館迄同

行の人であつた。

此處迄は九年前一度通つた事がある生保内

線は是が始めて——車中では土地の政友會

紳氏の話など聞く人——政黨——力——鐵

道など考支て見る。

用務地は角館小林區署だ嘗ては同窓の田中

君が居た筈だが今はあらず。

◆角館町

偶然にも農商務省森林測候所にN君を訪ふ

事となり全く奇遇であつた日光の山中で喧

嘩もした仲だ先方は既に二人の親爺となり

山人も亦一人の親となつた今更顧みれば感

慨無量。

九州にも居た同君から東北の野馬溪を勧め

られ時に東道役迄つけられた蓋し同君脚氣

を病ふとあり同行を得ず但昨夜は町の夜景

觀察にガイドの任を辱うした。

昔の御城下も今は唯廢墟の月を仰ぐのみ然

し此町の誇りとするものが一つある、某篤

志家の經營にかゝり一般に公開したる洋館

で名を晚香寮といふ館内には圖書及日用品

を備へ且タイプライターの設備ありて訪者

を一驚せしむ。

抱返の景勝

東北の耶馬溪——抱返の絶勝は生保内線の

終點神代驛から二十町生保内川に沿ふ里余

の景であつて水の美山の峻當に三歎に値す

但此景は道といふものがなく單に上流生保

内小林區署の軌道を然かも數丈の高きに辿

るのであつて時に心膽を寒からしむる個處

が多い然ればトロと雖も疾驅する事は危険

であつて徐行の外はないをぞろに架設者の

苦心が思遣られる。

川上に向つて進むに従ひ山伏石、みて岩、

鞍、掛松——見返瀧——中の島等相迎へ相

去る。

途中には幾つかの墜道もあり冷氣自づと夏

を忘れしむる又河中に屹立した岩壁に姫百

合の咲けるなど清涼の氣身に沁みる。

下流に同小林區署の貯木所あり試に掛員の

名を聞いたが大洞とかいふの外要領を得な

い「何れも若い人達です」と山人は老人組

に見られたまさか大洞盛一君でもあるまい

と踵を返へした歸途一大釣橋では其清烈な

る流れに見惚れて勇心禁する能はず案内の

若者と二人泳ぐ氣になつたがイヤ冷いのな

んのつて到底長く入るに堪へない。

河風涼しき岩上に懷しき河鹿の音を聞きつ

、遠く都の塵を捨て、壽命を延ばす。

然し實を云ふと余り期待した程ではなかつ

た由來我々は山の子であり仕事の性質上年

柄年中山から山へ飛歩くものであるから未

だ世に知られない神仙境に出會はす事が多

い。

偶々俗世間の賣物である名所といふものに

打突かつても漁師が海の名を見ると同然幾

分麻痺された感があり甚だ讚美の言葉も出

ない然し元は君には内密——

因に神代村は其名通り頗る神秘的に響くが

實際此邊の屋根は千木を頂き關西邊りの神

社の造りである調へたら面白い傳説もある

だらうが其暇なく惜しい事をした。

◆驛賣りの暴利

歸りは再び夜行だ相棒に大阪の肥料商とい

ふ老人を得て退屈を凌ぐ。

然し寢るに臺なしの窮屈な日に辛棒するの

も修養の一つかも知れぬ此點に於て日本の

鐵道は交通機關として修養機關を兼ねるも

のか呵々。

不平も眠くなれば忘れてしまふ只山形米澤

邊りで驛の呼賣りで買つた櫻桃が市内賣り

の四五倍もする、至つては馬鹿々々しくて

話がない。

水道落成紀念祝賀會 F H 生

水よ清く尊いその清よ我等は此の水にぞ

の位深く感謝を捧げねばならぬだらう我

等の生きたるが爲に食ふその食物と共に我

の体中へ入り体の爲めに働いて呉れる若し

我々が日常生活に唯一日でも之を失つたな

らばどうなるだらう、青葉若落の間より湧

き出するあの溪流よ天空に聳ゆる連山處々

に白布の如き瀧よ緑の老樹の下を抜け

出て來たる銀箭よ總てを偉麗する如き大自

然も此の一流の水に依りて自然の偉大さを

増すのではなからうか？世界の名所と云は

れる名所にこの水のない處は殆んどないで

あらう水は我々人類はもとよりあらゆる動

植物も此の恩澤を受けぬものがあるだらう

か其の水より受けた恩は余りに偉大であり

そして多くの場合容易に得る事が出来、爲
か等は余りに深く感じない従つて感謝の
念も殆んど感じない事がない然しあの湯を
へた時に飲んだ一掬の水はどの位貴重がある
だらう早魃が打續いて後雨を得た時農夫達
の喜悅はどんなだらう其れ共其れ等の喜び
も感謝も唯其の時だけで時日を経るに従ひ
後は又忘れられてしまふのだそれで我々
は杭の原から續いて居る演習林の麓から鐵
道管に由つて運ばれて来る水で不自由なく
供給されて居るこの清い美しい水が我が舎
を訪ふた日を感謝し記念せんが爲例年開催
せらるゝ所の水道落成祝賀會を今年も亦例
に依つて行はれた十五日の晩は空腹をか、
へてあの懐かしい鈴の音を待った。
やがてチリン／＼と鳴り渡れば南北寮の凸
茶目連吾れ第一番と日頃倍せるスピード
をかけて走せ参する様よ、さしも堅固の舎
も崩れんばかりの雑踏で皆自分の席の前に
着く、四方には紅白線の幔幕を張り詰めら
れた花瓶には垂れんばかりの青葉の枝が挿し
てある百燭光の電燈は晝をあざむくばかり
に燦爛として輝いて居る。
舎監の諸先生着席されると當日の榮冠を拜
受したる當直君恭しく花瓶側のティフル
に向ひ立つとワァツと云ふ聲援と共に拍手
喝采起る君ありつたけの聲を絞り出して
「黄金の如き山吹も若人の胸に躍る血の様
な躑躅の花も悉く散り盡して今や吾が木曾
谷は……」と雄辯の開會の辭をやらかす

次に炊事員の泣言あり、最後に山口先生の
吾々人類に必要な事及び其の効用を説かる
、例に由つて例の如く御馳走をバックク
やがてお定りの余興となる、一二三年の順
で吾れこそと聲を張り上げて歌ふ時々頓
狂な聲を出して皆なを笑はせる、先生余興
賛成？此の聲四方より起る、先生仲々沈着
にして容易に立たぬやがて先生徐ろ
に立ち上がられる、如何なる余興と緊張す
れば何んぞ計らん先生突然大聲を放ち「手
を前に伸ばせオイ」之れにて終り至極簡單
なり一同抱腹絶倒忽ち其れをまねる、次の
白矢はM先生へ向けらるゝ、或者曰く先生十
八番諸賛成？異口同音之れに和す悲しいか
な之れを拜聴するを得ず、北海道農大の寮
歌を高唱される「豊かに實れる石狩の野に
雁遙る沈みて行けば羊群聲なく牧舎に歸り
……(但し二番のみ)腹底より湧き出る男性
的の聲に皆な謹聴す又先生のお得意の一つ
コチャエ／＼をも聞く拍手喝采食堂をゆる
がす、最後はS先生なり先生先生と無音
放話之れは又大規模と喜び居る「それで
私が校歌の音頭を取りますから皆さんと
共に唱ひませう」で皆んながつかりオヤ
／＼先生うまく春負投げと御出でなさつ
た「小冠者連も致し方なさそうに立ち上る
校歌終れば山口先生の音頭で木曾山林學校
寄宿舎万歳を三唱して終りを告げぬ
二七八三 六一五

放浪漫談 つゞき

妙義と空つ風 越 峠 山人

家庭の事情や前記の経緯から心ならずも、
再び群馬縣へ轉じたが此度も博士や知友
R君を頼した事は感謝に堪へない。
上州名物は所謂空つ風に女房天下だが成程
津輕の婦天下よりは鼻息が荒い實際用務で
出張した場合など主人が間違へるのに
女房が傍で差し口をする主人が参つても女
房が頑張るといふ按排だ。
本縣には當時同窓の梶田君が居た。
妙義の秋色鍋川の鮎漁先づ以て浮世の塵を
拂ふに足る或時は相田峠を突破して輕井澤
に細江君を訪ね初雪の夜塚田君諸共炬燵を
圍んで昔話を花を咲かした事もある漫聞の
爆發には閃光燦々大煙柱を望見しつゝ、友の
安否を氣遣つた事もある。
オット忘れた今回の勤務は郡技手といふ中
々忙しい役廻りであつた抑も郡技手といふ
妙は一方に縣の命を畏み然して一方には郡
民の希望に副はねばならぬ甚だ以て智慧の
入る役柄ではある。
然るに赴任當初の條件に適せざるものもあ
り旁々或事情にて僅々三ヶ月にして退職せ
ねばならなくなつた。
然して之が山人の官吏としての最終であり
其の感想は別記の通りであるが之が頗る問
題を起し爲めに軍籍にある山人の兄弟にま
で影響を及ぼすし且御節介な役人もあつて

其筋から、密に内偵さへも来た由であるサ
テ人世の中は案外正直なのだ。
○弱者よ汝の名は下級官吏なり。
重石にて壓され狭き小櫃の底に手も足も
出でず然かも甚と堪辛き目に遭ひ居りて且
其價廉なるを漬菜なりとす。
下級官吏は畢竟人間の漬菜ならんばあら
ず。
◆愈々半商人
お役人から縁を離れた山人は直ちに東京に
走りブラ／＼三月も遊んでしまつた。
身から出た錆とはいへ一方の勤務先はサツ
パリ要領を得ず焦慮氣味と半自暴氣分でス
ツカリ貯金も果たしお終ひには配達夫にま
で成下らんと決心までしたものである。
然るに一方親爺の指金で又官界に拾ひい
く奔走し呉れたる同郷の先輩もあつたがR
氏との約もある遂に目下の半商業に従事す
ることゝなつた。
即ち社會公益事業と銘打つ財團法人東京府
の公設市場であるが山猿は矢張り山に棲む
べく徒らに都生活に馴れては其身の不幸で
ある。
今日安月給取位の分際では静に住むべく余
りに貧弱だサラリメンと……の都會人を見よ
如何に其生活苦の痛々さよ。
男子須らく乾坤一擲の大活動をなさんとす
れば則ち都に來れ安月給に甘んじ御無理御
尤も式で終らんとせば則ち田舎に留れ。
最後に乞ふ失敗の歴史を繰返したる山人の

轍を覆さらん事を即ち何事も忍耐勤勉が
第一である不平も或る點までは必要である
が努力もより以上大切ではあるまいか十何
年の勞役に服して目出度恩給の花に有り付
く者は幸福である。
徒らに轉じては其の末や必らず有耶無耶に
葬られん呉々も忍耐努力である黙々として
働く事である一ヶ所に永く留る者は馬鹿か
懶惰かといふ然り其の馬鹿か懶惰か最後の
勝利者である。

安濃津より 松島生

△
焼け付く様な暑さも次第に薄らぎ海水浴に
雑沓を極めた海岸も昨今ポツ／＼閑靜に向
ひつゝ有之候
△
午後三時迄の勤務は聊か苦痛なれど毎日此
の度の恩給法改正に伴ふ議論に花を咲かせ
て將に火花の散りそうな際といふ場面も偶々
展開され傍看の吾々にとつては何よりの清
涼劑に御座候
△

新卒業生任地

任 地 姓 名

- | | |
|---------------|-------|
| 三重高等農林學校林學科 | 原 金一 |
| 東京帝國大學農學部林學實科 | 小松 雄二 |
| 帝林局上松出張所 | 佐藤 銷守 |
| 樺太廳林務課 | 田中 文正 |
| 臺灣臺北洲文山郡龜山 | |
| 三井會社出張所 | 古畑 豊 |
| 東京帝國大學農學部林學實科 | 細窪 友雄 |
| 蕨原帝林局出張所 | 河崎 好正 |
| 東京物理學校 | 福澤 龍登 |
| 帝林局福島出張所 | 安部美千雄 |
| 旭川市旭川營林區署 | 阿部達三郎 |
| 福島町上段 | 池口 元助 |
| 北海道北見國 | |
| 野付牛山林派出所 | 多田 駒三 |

友 林 蘇 岐

勉學(在京)

臺灣

兵庫縣下良元砂防工營所

帝林局王瀧出張所

東筑摩郡山形村

釧路市釧路營林區署

岐阜公有林野官行造林署

東京帝國大學農學部林學實科

福島町興善寺

東京帝國大學農學部

附屬樺太演習林

大阪市東區京橋

株式會社大林組

青森縣下橫濱小林區署

勉學(在京)

帝林局野尻出張所

樺太落合山林派出所

山形縣西村山郡

寒河江小林區署

青森縣下三本木小林區署

東筑摩郡壽村

岐阜縣吉城郡古川町

新潟縣下大割野町

信越電力株式會社

福島町八澤

勉學(在京)

福島町中畑

太田 幸保

柳澤 宗重

河合 幸一

今井 龍雄

大池 澄雄

辻井 誠造

波羅 友治

市川 正

三輪 正大

金子 平雄

細江 金市

長谷川史郎

佐藤 謙二

伊佐治彌兵衛

樋口 靜雄

田中 稻實

中谷 力三

青木 茂幸

上島 菊造

林 廣一

松岡 武夫

奥原 亮

川上 榮司

大阪市東區京橋

株式會社大林組

岐阜縣益田郡下呂村

兵庫縣下良元砂防工營所

福島町上町

新潟縣下割野町

信越電力株式會社

東筑摩郡山形村

福島町木曾銀行

宮崎縣西諸郡加久藤小林區署

三殿帝林局出張所伐木所

岐阜縣加藤郡越原村

鹿兒島縣伊佐郡山野小林區署

西筑摩郡吾妻村

西筑摩郡新開村

岐阜縣惠那郡上村

青山 泉

福井 保郎

相吉 甲子永

原 久吾

安田 二郎

上條 高志

白洲 章吉

北原 辰男

松島 正彦

安江 明耕

櫻井 榮一

加藤 波男

片原 宏

平出 耕一

◆謝恩金募集廣告

長々本校にありて教鞭をとり親しく生徒の爲に其誠意を盡されたる

小貫堅藏先生

荒木 壺先生

吉川眞夫先生

候へども其後林友誌發行遅延の爲其意徹底せず是偏に先生に相濟まざる處に有之候何卒本校内西澤靜人宛に應分の謝金願ひ時最

近御卒業の諸兄に申進め候

猶本校國漢科の教師として多年其蘊蓄を傾けて教授に熱中され傍ら寄宿舎々監として重き任務にありし田中隆壽先生には去る六月上伊那高等女學校に榮轉被遊候就ては同じく在職中の御恩に酬ゆるの意味にて前記三先生と同じく本校内西澤靜人宛謝恩金御送附相成度右御願申上候

編輯謝罪記

杉山義次

私は初め非常なる熱意をもちて林友の編輯に従事し是非よくして林友誌及校友會の爲にならうと思ひましたが我儘で怠慢である私には確に重任であつたのであります私は自分で求めた不思議な苦しさは何日でも林友の編輯に味ひました仕事の難易ではなく私の頭の變調子であります、編輯は昨年度は大方私がやりましたが本年より生徒の委員が之をやり度いどの申出でありさうあるべきでありますから之を渡しましたが生徒にも試験があつたり旅行があつたりして丁度よくぬかぬ場合もある上に私は之に介在して随分怠慢でありました又印刷所も早く送附してくれませんかから段々遅くなつてしまひました種々不都合な廉がありますが何卒御ゆるしを願ひます。

校内彙報其他の報告は直ちに後に發送する百六十五號に掲載致します。

大正十二年九月廿三日印刷

正十二年九月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町〇番地
編輯兼發行人 安井 正夫
印刷 人 淺川 吉藏

長野縣松本市小柳町〇番地
印刷 所 淺川 印刷所
發行 所 淺川 書店

【定價金參錢】